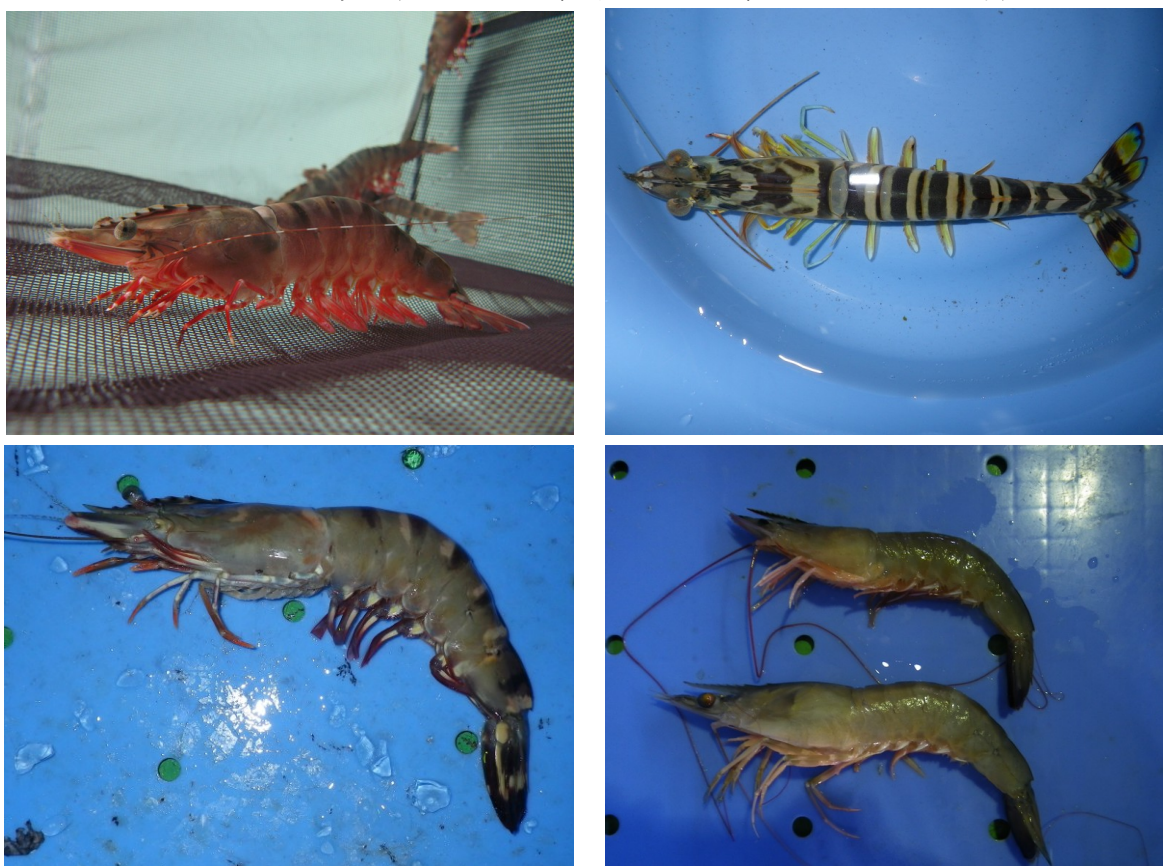


くるまえび類 (クマエビ、ウシエビ、クルマエビ等)



高知県にくるまえび類(属)は5種分布していますが、そのうち、主な漁獲対象となるのはクマエビ(あしあか、写真左上)、クルマエビ(写真右上)、ウシエビ(ごうじょう、写真左下)の3種です。また、近縁のヨシエビやトサエビを含むヨシエビの仲間(きえび、にがえび。写真右下、上:トサエビ、下:ヨシエビ)も大切なえび類資源となっています。これらのえび類は大型で味も良いことから、クマエビとヨシエビは高知県で種苗放流が行われています。

生物特性

ここで紹介した種は全て雌の方が大きく(図1:クマエビ)、産卵期は、種により少し違うものの、概ね初夏~夏です。産卵場については確認されていませんが、クマエビの成体は内湾域で漁獲されないため、外

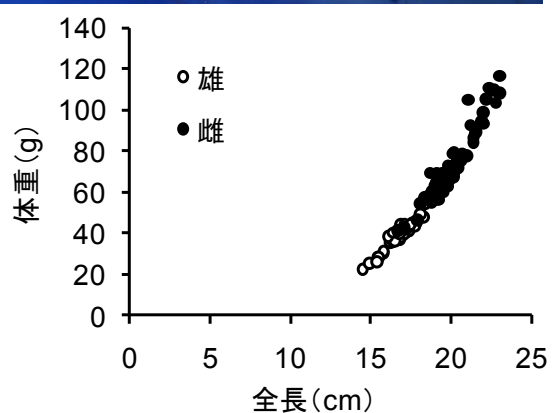


図1 須崎市沖小型底びき網で6月前後に漁獲されたクマエビの全長と体重の関係。

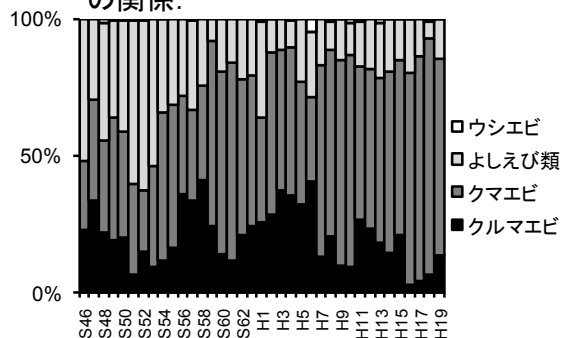


図2 高知市沖小型底びき網で漁獲されたくるまえび類の種組成(昭和46年~平成19年)。

海域が産卵場と考えられます。クマエビ、クルマエビ、ウシエビ、ヨシエビ、いずれの種も全長 5cm 以下の稚エビは浦戸湾等の内湾域に出現し、成長とともに分布域を変えます。ウシエビは主に内湾域に留まりますが、クマエビは外海域の水深 30~60m、クルマエビやヨシエビは内湾~外海域で 10cm 前後から漁獲されるようになります。

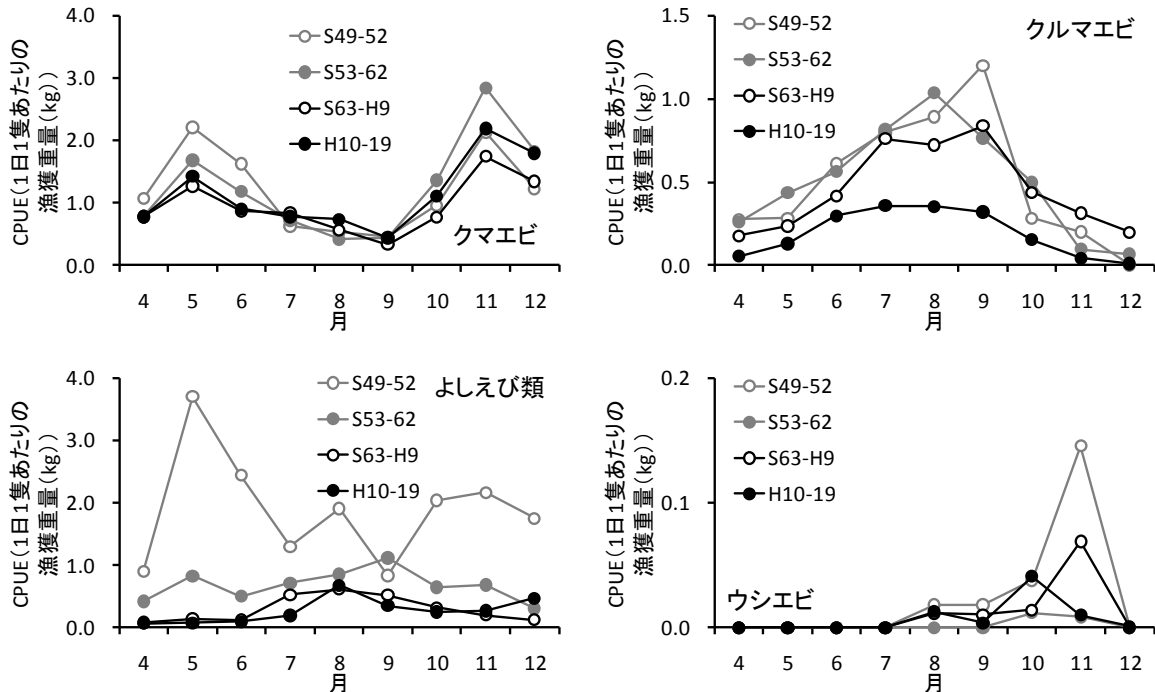


図3 高知市沖小型底びき網で漁獲された大型くるまえば類の1日1隻あたりの月別重量。県内の漁獲と資源動向

くるまえば類を漁獲する方法は、土佐湾沿岸域の小型底びき網漁業と内湾域の刺網漁業があります。これら2つの漁法は対象種が異なり、浦戸湾や浦ノ内湾といった内湾域の刺網漁業では、よしば類（ヨシエビ、トサエビ、フトミゾエビ）やウシエビを、小型底びき網漁業はクルマエビ、クマエビ、よしば類を多く漁獲しています（図2）。また、移動生態や分布域が種ごとに違うため、小型底曳網漁業では漁獲量の増える時期も種で異なります（図3）。

くるまえば類の漁獲量は、昭和50年代前半以降、減少傾向にあり（図4）、資源水準は「低位」、動向は「減少」と判断されます。この原因は、操業隻数が減少したことに加えて（こえば類、図2）、クルマエビやよしば類では1日1隻あたりの漁獲量（漁獲効率）が減少していることから（図3）、資源の減少も考えられます。

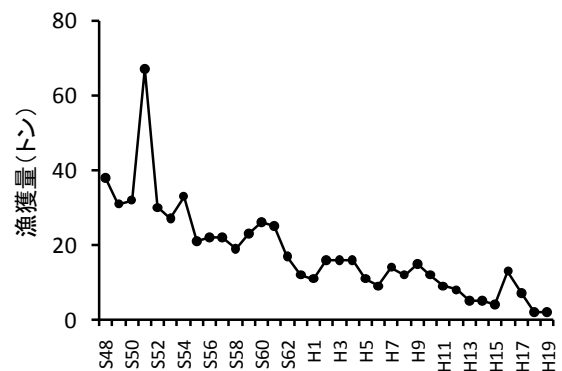


図4 高知県のくるまえば類漁獲量（昭和48年~平成19年）。